



発行所
 一般財団法人
 広島県動員学徒等犠牲者の会
 事務局
 広島市南区比治山本町12-2
 広島県社会福祉会館内
 〒732-0816 電話 (082) 252-0316
 印刷所 Taisei
 デジタルブック
 “衝突の証言”
<http://www.douingakuto.com/>

第62回原爆死没者追悼式を挙

昭和32年2月に当会が設立され、その年の10月に第1回の慰霊祭が挙行されてから62回目となる原爆死没者追悼式が、8月6日9時から動員学徒慰霊塔前広場で、遺族、来賓、代表校生徒など約250人の参列により厳かに挙行されました。連日の酷暑のなか、冷茶も用意させていただきました。

式 辞

理事長 井上 公夫

本日、ここに、多数のご遺族、ご来賓の皆様をお迎えし、第62回目の原爆死没者追悼式を挙行するに当たり、動員学徒・女子挺身隊員として出動中被爆し、犠牲となられた七千有余名の英霊に対し、深甚なる哀悼の誠を捧げるものであります。

本日参列されている広島県立広島商業高等学校の生徒さんと同年代の、その当時の中学生、女学生は、”欲しがりません勝つまでは”と、慣れない手付きながらも、一生懸命ひもじいのも我慢し、幼い生命でも国のためになるのだと喜び勇んで学業を捨て、ひたすら国の使命に殉ずることに大きな誇りを持って、頑張っ

ていたのであります。

そして、建物疎開作業あるいは軍需工場での作業などに従事中、多くの生徒さんが、原爆により若い生命を散らし、また傷ついたのであります。

広島県立広島商業高等学校の前身である県立広島商業学校の生徒さんたちも、土橋付近や現在の国泰寺町付近の雑魚場町での建物疎開作業などに動員中、137名の職員、生徒さんが犠牲となられております。

私たちは、現在の平和と繁栄を当然のように考えてしまいがちであります。このような多くの方々の尊い犠牲の上に築かれているものであ

目 次

第62回原爆死没者追悼式式辞	1
同 追悼のことば	2～3
原爆と叔母と私	4～6
二つの平和コンサートに出席して	6
清掃活動・供養会に参加して	7
次兄への父の思い	7
慰霊塔の絵 寄贈いただきました	8
金輪島慰霊祭に参列して	8
あとがき	8

るといふ事実を、決して忘れてはなりません。

被爆者の平均年齢は82歳を超えるなど高齢化が進んでおり、各地で被爆者団体の解散という報に接しております。

本会で清掃などの活動をされている方は、現在二十数名でございますが、昨年には前理事長の、また、今年に入り評議員を長年務めていただいた方の訃報に接しました。また、この度の役員改選に当たっては、昭和32年にこの会を立ち上げていただき、以来ずっと活動を支えてこられた方が、身体的な理由から役員を辞退されました。

このような中、先月、「動員学徒犠牲者に捧ぐ」と称したコンサートが、広島縁（ゆかり）の有志の方々の手により広島市内で開催され、私も動員学徒について説明させていただきました。

ました。その有志の一人は、犠牲となられた動員学徒の姪っ子さんであり、また、被爆体験伝承者の会員三人のうちおひとりも、姪っ子にあたります。そして、この度、会の副理事長に就任された方も甥っ子に当たります。

私たちの会の担い手は、設立当初は動員学徒の父母でありましたが、兄弟姉妹へ移り、その兄弟姉妹の子供へと移行していくものと思えます。継続して会が活動していくためには、この世代の人をいかに確保していくか検討していかなければいけないと思っております。

また、被爆者から直接話が聞けなくなる日が近くなるなか、会の活動を通して、被爆の実相や平和への思いを継承し、今後とも「核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現」に向けて、戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く後世に伝えて参りたいと思っております。終わりになりましたが、このたびの豪雨災害によりお亡くなりになられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災されたすべての皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

本日の式典に際し、ご遺族の皆様並びにご臨席を賜りましたご来賓の皆様には、厚くお礼を申し上げます。また、動員学徒の御霊に永久の安らぎと、ご遺族の皆様への平安を、心からお祈りし、式辞といたします。

追悼のことば

広島県知事

湯崎 英彦

本日ここに「第六十二回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます。

顧みますと、あの忘れることのできない日から、七十三年という歳月が過ぎ去りました。

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し一瞬にして広島を焦土と化し、無限の可能性を秘めた、動員学徒や女子挺身隊の方々に始めとする、多くの尊い生命が失われました。

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに徒事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかる時、哀惜の念、胸に迫るのを禁じ得ません。

また、最愛の我が子や肉親を失なわれた御遺族の皆様には、長い間言葉に尽くせない深い悲しみと多くの困難を乗り越えてこられたところであり、その間の御心労と御努力の程は、察するに余りあります。

私たちは、先の大戦の体験から、「あやまちは一度と繰り返しません」と固く決意しました。

しかしながら、戦後生まれの世代が大多数を占める中、戦争体験、被爆体験の風化が懸念され、一方では、今なお、恒久平和と核兵器廃絶への道のりには、険しいものがあります。

こうした今こそ、原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には、「核兵器のない世界」に向けた強い思いを国際社会と共有し、平和と安定の実現に向けて、努力して行く責任があると考えます。

そのためにも、戦争の悲惨さや、そこに幾多の尊い犠牲があつたことを次の世代に語り継ぐとともに、国の内外に、平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません。

そして、この二十一世紀を、誰もが心豊かに暮らせる、より良い社会とするため、全力を尽くしていくことを、お誓い申し上げます。

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様のお多幸を、心から

お祈り申し上げます、追悼のことばといたします。

広島市長

松井 一實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第六十二回原爆死没者追悼式が執り行われるに当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

七十三年前、ひたすら我が国の安泰を願いながら、動員学徒として、また、女子挺身隊員として、軍需工場での作業あるいは建物疎開作業などに従事されていた数多くの方々が、一発の原子爆弾により、若くしてその尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛なる肉親を亡くされた御遺族におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと、拝察申し上げます。

今日の豊かさや繁栄があるのも、こうした尊い多くの犠牲に負うものであることを忘れず、二度と悲惨な戦争を繰り返さないよう、平和への思いを共有していかなければなりません。しかし、戦後七十年以上が経過し、被爆者の高齢化が進む中、被爆体験の風化や若い世代を中心とした平和意識の低下・希薄化が強く懸念されています。こうした状況に対



ご遺族の参列

応し、二十一世紀を核兵器や戦争のない「平和な世紀」とするためには、被爆の実相や平和への思いを、次代を担う世代へ継承していくことが重要かつ緊急の課題です。

このため本市では、被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」の養成を実施しており、現在、一〇〇名を超える被爆体験伝承者に活動していただいております。また、被爆の実相を後世に伝えるため、広島で被爆された方の体験談をビデオに収録し、保存するとともに、被爆体験の意味や平和への思いを次代を担う世代へ継承するために活用しております。

こうした一つ一つの取り組みを大切に、世界恒久平和にまい進する決意を新たに、戦没者の方々の犠牲を尊い教訓として深く心に刻み、戦争の悲惨さと平和の尊さを末長く後



ご来賓の参列



追悼式正面

世に語り継いでまいります。
終わりに、御霊のとしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様の御健勝を祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

広島県立広島商業高等学校

津野 優

八月六日、この日は私たち、広島の高校生にとって特別の日です。「卒業」は現在の高校生にとっては当たり前の言葉になっていますが、七十年前のこの日、私たち、県立広島商業高校だけでも、一年生十八名、二年生六十名、三年生二十一名、四年生三十五名の生徒が広島市内で被爆し、原子爆弾の犠牲となり、永遠に卒業できなくなりました。その人たちの無念を思うとき、

もう二度とこのような悲劇を繰り返してはならないという思いを強くします。

当時の広島商業は、県立の「広島商業学校」で五年制でした。五年生は繰り上げ卒業となり、三菱造船に勤労働員されていました。校舎は、現在の江波校舎が陸軍兵器学校として接収されていたため、今の広島市立工業高校がある旧県師範学校跡地にありました。一・二年生は当日市内での建物疎開の作業の指示を受けるため、校庭で待機していた時に被爆しました。三・四年生は勤労働員先のため、自宅待機しており、ほとんどは自宅で被爆しました。その中で、四年一組は現在の市役所付近で建物疎開の作業にあたりとして被爆しました。二年三組は、建物疎開に向かうため、土橋付近を通りかかった時に被爆し、全滅しました。死亡はされないまでも、「広島商業学校」のほとんどの生徒・教員が負傷し、その後の人生に大きな傷跡を残しています。私たちは、この事実を決して忘れてはなりません。

オバマ大統領がヒロシマを訪問されて一周年の昨年五月二十七日に、ボランティア活動を行うクラブである私たち広島商業インターアクト部は、広島県全体のインターアクト部の生徒に平和公園に集まってもらい、「今始めよう、平和公園を知る試

み、ここには町があった」と題して、平和公園は最初から公園であったわけではなく、多くの人が普通に暮らしていた町であったことを実感してもらおう取り組みを行いました。そして、「原爆投下前の日常」と「投下後の惨状」の両方を知ってもらい、原爆で失われたものは命や物だけではなく、「数えきれないくらいたくさん人の何か」であったことに、気付いてもらうことができました。

これからも私たちは、被爆された方々の思いを受け止めていく営みを続けていき、全国の高校生に共有してもらおう努力をしていきたいと思えます。そして、私たち高校生から、一瞬にして「卒業」の機会を奪ってしまう「戦争」・「核兵器」の廃絶を願うとともに、七十三年前の悲劇を忘れず伝え続けることを宣言し、誓いの言葉とします。



県立広島商業高等学校生徒代表 津野優さん

第62回原爆死没者追悼式

式次第

- 一、開会の辞
- 一、国歌斉唱
- 一、黙祷
- 一、式辞
- 一、来賓追悼の辞（敬称略）

広島県知事 湯崎英彦

（代読）健康福祉局社会援護課長 日下仁彦

広島市長 松井一實

（代読）健康福祉局高齢福祉部長 中村一彦

- 一、学校代表生徒の追悼の辞

広島県立広島商業高等学校 生徒代表 津野 優

- 一、献花及び来賓者の披露（敬称略）

（衆議院議員）

岸田文雄 平口 洋 河井克行

新谷正義 寺田 稔 佐藤公治

小林史明 小島敏文 齊藤鉄夫

（参議院議員）

宮澤洋一 溝手顕正 森本真治

山本博司 谷合正明

大塚耕平（国民党代表）

（広島県議会議員）

畑石顕司 石津正啓 辻 恒雄

砂原克規 中原好治 山下智之

大島昭彦 西村克典 西本博之

河井案里 福知基弘 佐藤一直

宮崎康則

（広島市議会議員）

今田良治 山路英男 森野貴雅

太田憲二 平木典道 三宅正明

近松里子 元田賢治 米津欣子

伊藤昭善 海徳裕志 定野和広

安達千代美

（広島市遺族会）

副会長 中島百合枝

（広島県立広島商業高等学校）

- 一、閉会の辞

教頭 土屋 研

原爆と叔母と私

村 興 久美子

私はいま被爆体験伝承者として、寺前妙子さん(当会前副理事長)の被爆体験と平和への思いについてお話をさせて頂いています。そのお話をさせて頂きたいききと、伝承者として原爆の悲惨さを伝える意義を強く再認識できた貴重な一冊の本を、学徒動員された叔母の被爆直後のありさまを交えて、紹介をさせていただきます。

私自身は戦争が終わって13年経って、広島中央電話局があった袋町で生まれ育ちました。通っていた小学校の西校舎は原爆の時に臨時の救護所として使われていた被爆建物で、階段の壁には被爆当時の沢山の伝言がそのまま残っていました。近所のバス停には【人影の石】がむき出しのまま残っていました。それでも子供の頃の私にとつて、広島は街はバスや路面電車が走り、川には観光ボートが浮かんで、夏の浴衣祭りや花火大会、年末の多びす講祭りなど、とても活気に満ちていて、被爆当時「75年間は草木も生えない」と言われた焼け野原だった事など、想像すらできませんでした。

また、私の母の家族は、祖母と母

を含めた兄弟5人が被爆しており、母のすぐ下の妹は原爆で亡くなっていました。が、亡くなった妹を除くと誰も皆、外から見える所に傷跡ひとつ無く、元気に仕事に就き、結婚して子供を授かっていました。

ですから私は、母や祖母から何度も原爆の話聞いてはいたもの【原爆】は過去の事で、歴史の教科書の1ページ、今の自分には直接の関わりはない」そのように感じていました。

そんな中、被爆から50年を迎えた頃、広島にやってきた親戚の人達を案内して母と一緒に平和公園を訪れた時の事です。原爆ドームの前に立ち止まった時、母は二階の部分を見上げて「私はあそこに居たんよ。」と指差したのです。それまで、建物疎開作業の休憩中に被爆して、飛行機を見たにもかかわらず、かすり傷ひとつ無く、衣服もほとんど無傷だったので、大怪我をした人達に申し訳ないような気持ちでいっばいだった”と聞かされていた私は本当に驚きました。よくよく聞いてみると、母の勤めていた会社は原爆が落ちる少し前まで、産業奨励館の2階にあったのですが、県の土木関係の部署を奨励館の中に集約させるために、近くに移転させられていたそうです。それでも移転先は市内の中心部だったので、もしいつも通りに出勤していれば、母の命はなかつ

たはずでした。たまたま8月6日に親戚の家の建物疎開作業の人手が足りず、母は会社を休んで作業に出ていたため、助かったのだということでした。

え！もし、あの日ほんの少し何かが違っていれば、母もここにはいなかったのだ、もちろん私も！：私の中で【原爆】が一気に他人事ではなくなった瞬間でした。

その後、自宅に被爆前のドームの中の写真が何枚か残っている事もわかって、広島市に提供することに、それがきっかけで、あまり多くを語る母ではありませんでした。が、亡くなる前の何年間か証言ビデオを撮っていたいたり、爆心地復元作業の集まりに参加させていただいたりしました。母の晩年に寄り添った私は、母の遺品整理をする中で原爆関係の資料を見る度に、何か母からバトンを託されたように感じていました。何かから手を付けたらいいのかわからないままでした。

そんな時、市の広報誌の中に『被爆体験伝承者』についての記事を見つけ、人前で話すことがあまり得意でない私でしたが、ただただ【原爆】について、もつと知りたい、何かできることをしたい”という一心で、研修に参加させて頂くことにしたのでした。

そしてその研修の中で、寺前さん

をはじめ何人も被爆者の方々から原爆の時のお話をお聞きしたり、一緒に現地を歩いて当時の様子を覚えて頂いたり、沢山の映像、画、文章などの資料に触れる事で、原爆の本当の恐ろしさを知りました。

そんな時、私にとって衝撃的な一冊の本と出会いました。

それは、『広島第二県女二年西組』—原爆で死んだ級友たち— 関千枝子著』です。

この本は昭和20年8月6日に雑魚場町で建物疎開作業中に被爆した広島県立広島第二高等女学校の二年西組の生徒たち39人、教師3人、そして当日欠席していた生徒7人についての詳細な記録です。当日体調を崩して、建物疎開作業を欠席して被爆を免れた、著者の関千枝子さんが、40年の後に、生き残った級友達や亡くなった級友達のご遺族・関係者を丹念に探し歩かれ、8年もの歳月を費やしてまとめられた本です。当時13歳から15歳だった【二年西組】の少女達一人一人が72年前のあの8月をどのように生き、どのようにして死んでいったのか、また生き残った生徒達は心に傷を負いながらどのように生きようとしたのか、まさにそこに書かれているのは、単なる被爆記録ではなく、一人一人が“人間”として、一家の娘として、動員学徒として、辛く哀しく

生きていた証です。そしてまた残されたご遺族の方々のその後についても、詳しく紹介されています。(この本によりますと、雑魚場町で建物疎開作業中に被爆した39人の生徒は、同年8月20日までに38人が亡くなり、奇跡的に生存していた1名も37歳の若さで亡くなっています。)

その中に私の母の妹、石川清子の事も次のように、詳しく記されています。

8月6日の朝、石川清子達二年西組の生徒が集まったのは市役所の裏、爆心地から1.1kmのところ。この辺りでは3000人を超える人々が作業をしていた。

生徒達は、ロープで引き倒された家から道に向かって一列に並び、担任の先生が、引きはがした瓦を先頭の生徒に手渡すと、一人ずつ『ハイ』『ハイ』と順番に送って、最後の一人が道端に積み上げていく。(建物疎開作業は、いつも瓦運びから始まった。)

その時かすかにエンジン音が聞こえ、ゆらゆら落ちてくる落下傘が見えた。これは爆弾ではなく、爆発の威力を測るための観測機器で、爆弾より先に落下傘に吊るして投下されたものであった。

そうとは知らず、多くの広島市民

が見上げた様に、生徒皆が、何だろうと騒ぎ始めた瞬間、もの凄い光で意識を失った。

気が付くと辺りは真っ暗。しばらくして暗闇の中から、真っ赤な炎が燃え上がり、その明るさで初めて辺りが見えた時、皆の顔は焼けただけ、服はボロボロ、誰が誰だかわからない。それでも友達同士、手を繋いで逃げようとするが、半そでで熱線に焼かれた腕は、指の先まで火傷でズルズルに皮膚がむけ、すぐに手が離れてしまう。日頃から、もしもの時は学校へ帰るように言われていたので、ほとんどの生徒達は、学校のある南に向かって必死で逃げた。

清子が、照りつける太陽の下、裸で5時間以上かけてやっこの思いで学校の前まで辿り着いた時、同じクラスの本地文枝に出会った。お互い変わり果てた姿だったが、何とか分かり合い、抱き合っ泣いた。2人は避難してきたのが早かったため、学校で唯一の畳の部屋に寝かされたが、多くの避難学徒やけが人で部屋はすぐに一杯になり、怪我人のほとんどは教室の床の上に直に寝かされた。

2人とも火傷で顔が二倍くらいに腫れ上がり、顔一面に薬を塗られていて、駆け付けた本地の母も清子の母も、2人の声を聴くまでは、そこに横たわっているのが我が娘だ

と信じる事ができなかった。本地は逃げる途中、洋服に火が着いて、それを消す為に防火水槽に飛び込んだそうで、本当に酷い全身大火傷で、被爆後の詳細を気丈に母親に語りながらも、2日目に「君が代」を歌って亡くなった。

清子は木綿の下着を着ていた所は焼けておらず、顔・両手・両足の膝から下を焼かれながらも、意識ははっきりしていて、12日間も懸命に生きていた。最初はトマトや胡瓜を口にしたが、すぐに口の中がただれて食べられなくなり、水だけを欲しがった。しかし、当時は火傷を負った者に水を飲ませると死ぬから、飲ませてはいけなと言われていたので飲ませてやる事は出来なかった。

火傷の傷にハエが卵を産み、その卵がかえって次々にハエの幼虫、ウジ虫がわいて、それを清子の母が一匹ずつ取っていくのも辛い事だった。膝を立てたままの身体は次第にカチカチに固まっていき、ドロドロの指がくっつくのを清子はとても



叔母 石川清子

気にしていた。

8月15日、天皇陛下のラジオ放送を聞くため、清子の母達付き添いの者は、別の部屋に集められたが、部屋に戻り日本が降伏したとも言えず困っていると、清子はすぐに周囲の様子で察したらしく、「私達がこんな姿になったのに、日本が負けて悔しい！」と本当に怒り悲しんだ。そして3日後に亡くなった。

清子の母は、遺体は学校で沢山の被爆者と共に火葬してもらい、遺骨を持ち帰った。(敬称略)

母も祖母もすでに他界し、生きていた母の兄弟たち(私にとっては叔父・叔母ですが)は、当時1歳から8歳の子供だったため、確かな記憶はほとんど無くて分からない事だらけでした。しかし、この本のおかげで、72年前の母の家族の8月の生々しい日々がはっきりと浮かんできました。

叔父・叔母達は、この本のおかげで、今まで知らなかった祖母の苦労や、亡くなった清子姉さんの事を改めて心に刻む事が出来たと、感慨に浸っていました。

考えてみると、若くして亡くなった学徒達には、当然のことながら【子】も【孫】もいません。72年経った今となつては、【親】も【兄弟】も亡くなられているか、ご高齢になられていますので、【姪】や【甥】が

かろうじて伝え聞いている事でしょうか、若くして無念の死を遂げていった多くの学徒達の事を知ることが出来ないのではないのでしょうか。

その意味で、この本に出会うことが出来て、改めて事実を語り継ぐこと、記録に残すことが、「原爆のように悲惨で不幸な出来事は、二度と繰り返してはならない。」という意識の喚起・醸成に、いかに大切なかを痛感させられました。

また、この本の執筆に当たって、広島県動員学徒等犠牲者の会の整理された名簿が、学徒の遺族探しに大変役立つことが述べてあり、当時の会員の皆様の御精励さと御苦労が伺われました。

私にはまだまだ知らない事、学ばなければいけない事が沢山ありますが、これからも被爆者の皆さんや専門家の方々に一つ一つ教えていただき、戦争のない平和な社会づくりの一助となれますよう、微力ながら被爆体験を伝承させていただきたいと思っています。



「二つの平和コンサート」出席して

本地 正治

ともしび第128号でご紹介しましたように、7月7日の七夕の日に、広島市中区上鞆町の流川教会で、バイオリン、チェロ、ピアノの弦楽カルテットによる「平和の祈りコンサート」動員学徒犠牲者に捧ぐ」が開催されました。

映画「サウンド・オブ・ミュージック」の挿入歌のメドレーなど、戦火の中で避難する子供たちの命の大切さ、戦争という困難な状況下での歌うことのすばらしさ、敵国に永久に屈することのない母国への讃歌をテーマにしたものなど、13・14歳で犠牲となった動員学徒へ捧げる「平和の祈り」にふさわしい、スケールの大きな、厳肅な雰囲気の曲が随所に披露されました。

ベテランの名奏者の皆さまの奏するもの哀しい曲調から、戦争の悲しさ、平和の大切さは十二分に伝わったと思います。是非とも来年も開催していただくことを切望します。

このコンサートが終わって、ふと正面を見上げると、白い壁面の黒い十字架が目に残りました。

流川教会は、原爆により外壁の一部を残して崩壊したそうです。翌年になって、戦争犠牲者を追悼し、平和を希求するシンボルとするため

に、瓦礫の下に埋もれて焼け残った木材を組み合わせて、縦2m横1.2mの黒い十字架が作られたそうです。

現在は、2013年に建築された教会の礼拝堂の、祈りを奉げる方々が見上げる白壁面の中ほどの位置に、聖なる佇まいで掲げてあり、私たちに「ノーマアヒロシマ」と、肅然と語り掛けているようでした。

また、かつて当会の常務理事をしておられた皆田正明氏主催の「愛と平和のコンサート」が、本年9月8日に広島県民文化センターで開催されました。

このコンサート第二部は、「歌曲」ヒロシマの悲しみと平和の祈り」と題して、原爆投下から73年経った今日、原爆の悲惨さや平和の尊さに対する思いを新たにしていただきたいとの願いから企画されたものです。

その最初の「慟哭の歌」を紹介します。

この歌は、当会が昭和50年作成の冊子「戦後三十年の歩み」と以前発行の「ともしび」に掲載している3人の動員学徒御遺族（福原チエ子さん、松田雪美さん、本地シズヨさん：いずれも故人）の詠んだ和歌と、主催者の皆田さんが補作したものを歌詞とし、皆田氏が曲を付けたものですが、ソプラノ歌手の

方の切々とした歌声にのせて、我が子を原爆で亡くして慟哭する母親の嘆き悲しみが、会場全体に深くしみわたっていました。



流川教会礼拝堂壁面の黒い十字架

「慟哭の歌」

プロローグ
いとし児を 召された
この母の 嘆きは
永久に忘れじ 命枯れても

1
如何にせん
姿は変わり 果てぬれど
呼べば懐かし いとし児の声
(詞 本地 シズヨ)

2
いたわしや
戦のために 散りし子は
間近く開く 花の蕾を
(詞 福原 チエ子)

3
真夏日の
燃えたつさ中 苦しみて
死せし生霊の 怒り忘るな
(詞 松田 雪美)

4
尊い命で
築き上げた 平和ぞ
ともに守らん 明日のために
ともに祈らん 未来のために
(詞 皆田 正明)

「清掃活動・供養会に参加して」

国元 洋子

本会へ入会し、動員学徒慰霊塔周辺の清掃活動と読経による供養会に参加させていただいたのは、今年(平成30年)の春からです。

参加したきっかけは、長くこの活動を続けている親友からの誘いでした。

彼女から活動内容を詳しく聞くことなく、最初は、ただ私にできることであれば、という気軽な思いでした。

まもなく、ある理事さんに、「この活動の主旨は何ですか?」とお尋ねしますと、「月に2回の慰霊塔周辺の清掃は、学徒動員で犠牲になられた方々の慰霊のためと世界各国の人々に、少しでも気持ち良くこの地を訪れていただくために行っています。また、月に1回の読経による供養は同じく慰霊のためです。そして、これらを継続実施していくこ



とが、戦争のない平和な社会づくりには貢献できないのではないかと思っただけです。」とお答えいただきました。原爆、特に

動員学徒について、私はこれまでに理解していたようで、実はわかっただけで、何も知らないことに気づかされました。原爆の日には、可能な限り原爆ドームの横を通って平和公園へ行っていたのに、動員学徒慰霊塔の場所すら知らなかったのです。

早速インターネットで検索しました。動員学徒等犠牲者の会の方や伝承者の方々の声や手記も読みました。

また、「広島原爆前後の手記 黒い蝶」(松岡鶴次著)を再読しました。数年前に読んだ時と今回とは、少し深掘りするだけで、息苦しさを感じるくらい、感情や思いが大きく違い、この会に少し参加させていただけただけで、こんなにも、原爆や動員学徒に対する意識が違ってきたのかと、自分ながら驚きました。

あらためて、お国のためと信じて(信じさせられて?)、若くして勤労奉仕で亡くなられた方々の悲哀と無念さに思いをはせるとともに、これからは、清掃・供養させていただくこの活動の主旨を、誘ってくれた彼女のように、私なりに人に伝えていけたらいいなと思っています。

次兄への父の思い

井上 公夫

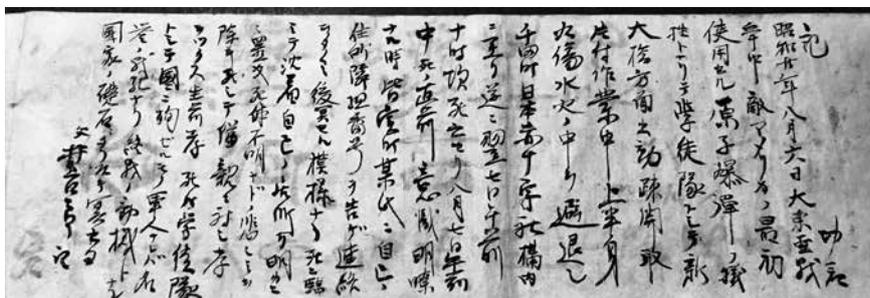
私の次兄功は、広島市立中学校(現広島市立基町高校)の1年のとき、爆心地に近い小網町で建物疎開の作業中被爆し、顔の判別もつかない大やけどを負い、翌日死亡しました。

亡き息子への思いを、父四郎は、次のように綴っています。

記

昭和廿年八月六日大東亜戦争中敵アメリカの最初使用せる原子爆弾の犠牲となりて学徒隊として新大橋方面出動疎開取片付作業中上半身火傷水炎の中を避退し千田町日本赤十字社構内に至り遂に翌七日午前十時死亡せり八月七日午前中死の直前意識明瞭なる時皆実町某氏に自己の住所隣組番号を告げ連絡をたのみ後冥せる模様なり死に臨みて沈着自己の居所を明かにし置処死体不明などの悲しみを除き死して猶親に對し孝をつくす生前孝が学徒隊として国に殉せるもの軍人なれば名譽の戦死なり終戦の動機となし国家の礎石たり以て冥せよ

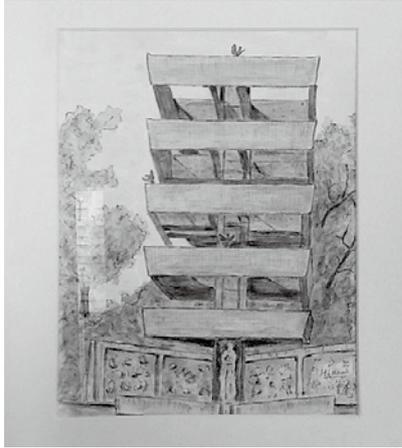
父 井上四郎 記



慰霊塔の絵

寄贈いただきました

7月7日の「平和への祈りコンサート」の会場で藤登弘郎(広島市安芸区在住)さんから動員学徒慰霊塔を描いた水彩画の寄贈を受けました。藤登さんは、原爆死没者を慰霊する碑などをたくさん描いておられます。



井上理事長と藤登弘郎さん(右)

金輪島慰霊祭に参列して

辻 靖司

本年10月21日の金輪島慰霊祭には約30名の参列者がありました。広島テレビ、中国新聞などメディアの取材もあり、後日、報道されたようです。ボランティア活動や伝承講話活動など行っておられる方、8名の参加がありました。また、宝塚市、竹原市など遠方からの遺族の参列もありました。

慰霊祭では73年前に金輪島の暁部隊の軍属として働いておられた方が、次から次と運び込まれた重症患者の手当の様子を話されました。

「医薬品はなく、垂れ下がった皮を手で剥ぎ、海水で傷口を洗う事しか出来なかった。自分の家族は全員無事だったのに、十分な治療が出来なかった犠牲者や遺族に申し訳なく、金輪島には来れなかった。73年ぶりに訪問し、遺族の方々にお詫びをして心のわだかまりが少し溶けた。」と涙を浮かべながら話されたのが印象的でした。

慰霊祭終了後、帰路の乗船時間まで慰霊碑近くの記念碑、防空壕などをご案内しました。

11月4日には、資料館ボランティア土曜日グループの8名で慰霊碑参拝と記念碑や防空壕の見学、金輪島神社参拝、重症患者収容所であった場所や私が被爆体験を伝承している

寺前妙子さんが収容されていた場所もご案内をしました。

ご寄付お礼

平成30年6月から平成30年10月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございます。

- 森下 弘 様
- 志水 清 様
- 石田 英 雄 様
- 谷増 喜久雄 様
- 梶川 キヨ子 様
- 桑原 宏 子 様
- 向井 宏 子 様
- 匿葉 宗 人 様
- 宇葉 普 恵 様
- 清水 昭 夫 様
- 榎寄 昭 夫 様



ご寄付いただく際には、左記の口座へお振り込みください。

郵便局

振替口座

013001618858

一般財団法人

広島県動員学徒等犠牲者の会

あとがき

今年の日本シリーズ、ソフトバンクは憎たらしいくらい強かった。さすが王者！でしたね。カープファンにとっては、とても残念な結果となりましたが、投手陣が好調で、ソフトバンクの強打陣を良く抑えたので緊迫した好ゲームが多く、ハラハラドキドキの連続で、最後の最後までファンを楽しませてくれました。次回のチャンスには、少しでも不安材料がある投手は抑えには使わないことと、攻撃陣が挑戦者のつもりで、大振りしないでコンパクトなスイングに努めることに徹すれば、逆の結果になるのでは... また一年、期待を持って待ちましよう！(新井さん、CSファイナルの同点打、みんな忘れないよ！ありがとう！)そして、お疲れさま！

(本地正治)

